

論理的思考から伝え合う力へ～海部高校の取組～

一 本校の概要

海部高校は平成十六年に県南の三校、宍喰商業、海南高校、日和佐高校が統合再編してできた、今年度開校十六年目を迎えた高校です。徳島県最南端の高校で、郡内唯一の高校となっており、開校当時は約五三〇人いた生徒も、地域の少子化に伴い、現在では各学年四クラス、二九七名の生徒が在籍しています。地元海部郡内の生徒が約76%、郡外からの生徒が約24%となっています。開校当時に比べると、海部郡外からの在籍生徒数は約二倍に増えています。また、近隣には単独寮があり、今年度は三〇名の生徒が学校に隣接する寮から通学しています。

本校には、普通科・情報ビジネス科・数理科学科という三つの科が設置されています。

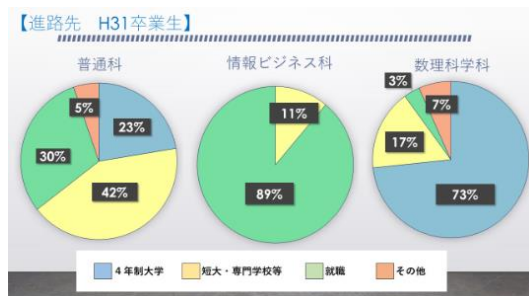
普通科では、就職や進学などさまざまな進路希望に対応できるように、多岐にわたるカリキュラムが用意されており、少人数授業や習熟度別授業を通し、進路実現に向け、力を入れて取り組んでいます。情報ビジネス科ではビジネスの知識や理解力を身につけ、資格や検定の取得に励んでいます。また、次世代経営者育成プログラムと

徳島県立海部高等学校 教諭 生垣千尋

いう体験的な学びを取り入れ、実践力を育んでいます。

数理科学科では発展的な学習に取り組み、自ら課題を発見し、解決していく能力の育成に力を入れています。

校訓・教育理念、そして学科ごとに目指す力の育成に向け、学科独自の取り組みをおこなっているのも、本校の特色だと考えています。



卒業後の進路も三つの科に特長があります。普通科は四年制大学進学、短大専門学校進学、就職が約三分の一ずつ、情報ビジネス科は就職が約九割、進学が約一割、数理科学科は四年制大学進学が約七割、短大専門学校進学が約二割、就職その他が約一割となっています。この進路先からも、高校三年間で学ぶこと、身につけていくことが、学科ごとに異なることが分かります。

二 ねらい

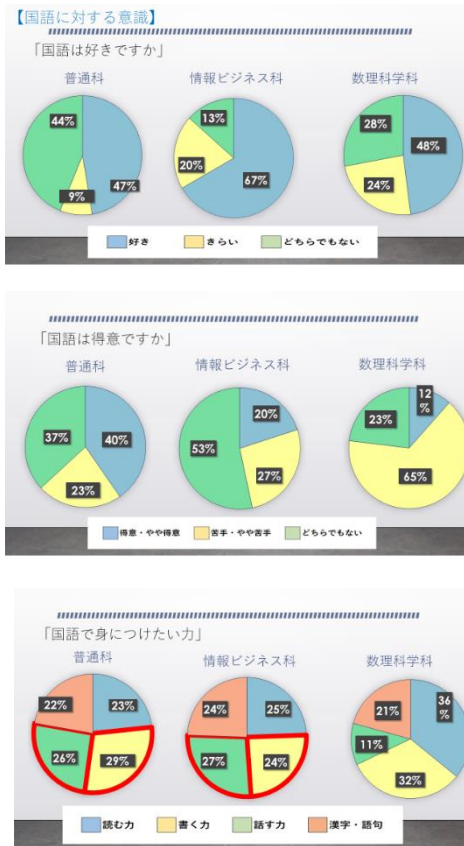
本校の生徒は小さなコミュニティで育ってきた生徒が多く、素朴

で素直な生徒が多数在籍しています。運動部、文化部ともに部活動に取り組み生徒も多く、放課後、活発に活動する生徒の様子が見られます。その反面、何事にも受身な生徒が多く、特に授業においてはその姿勢が顕著に表れています。

また、生徒の多くは、人間関係が固定化された少人数の集団で育ってきており、新たな環境でのコミュニケーションを苦手とする生徒が目立ちます。小さな集団の中では、競争意識も低く、高校に入学後、その学力差はますます広がっている傾向にあります。

国語に対するアンケートをとると、「国語は好きですか」という項目では、どの学科も「好き」だと感じている生徒が多くなりましたが、「国語は得意ですか」という項目では、「どちらでもない」「苦手・やや苦手」と答える生徒が増えました。

「国語のどんなところが苦手か」という項目では学科により違いができました。普通科・情報ビジネス科では「書くこと」「話すこと」という表現分野を挙げた生徒が半数以上いました。「国語で身につけ



たい力」についても、普通科、情報ビジネス科では「書く力」「話す力」を身につけたいと答えた生徒が約半数となりました。

本校の普通科・情報ビジネス科の生徒は、社会経験の少なさから、コミュニケーション能力は低く感じられます。また、語彙や知識が乏しいため、勘違いや思い込みからの読み間違いや聞き間違いも多く、また、表現力にも欠けています。

国語科教員で生徒に「つけさせたい力」について話し合い、自分の意見を述べるためには語彙力はもちろん、文を読み、または相手の話を聞き、内容を理解することが必要だという意見でまとまり、読む力・聞く力を土台として、書く力・話す力が育成されると考えました。そこで、読む・聞く練習を繰り返しながら、書く力や話す力といった表現力を育成していくことを本校国語科の課題とし、今回の実践へとつなげました。



三 実践① 「他者紹介をしよう」

(1) 実践内容

普通科の選択科目の一つに「情報とコミュニケーション」という授業があります。

これは、学校設定科目の一つで、主としてコミュニケーションに

実践①
普通科・・・「情報とコミュニケーション」との連携

2年生（6名）	3年生（9名）
自己紹介をしよう	今年の抱負
他者紹介をしよう (1) インタビューにいきこう (2) 他者紹介をしよう	敬語で話そう 面接練習をしよう

ついて考える授業です。授業内容がコミュニケーションという表現を扱うものであるため、毎年国語教員も教科担任として配置されています。

今回は、2年生でおこなった「他者紹介をしよう」を実践として紹介します。

「他者紹介をしよう」は今年度新しく赴任された先生方にインタビューに行き、そのインタビュー内容を基に、他者紹介としてその先生方を紹介するというものです。

雑誌のインタビュー記事を読み、インタビューがどのような質問をしているかを考え、インタビューの役割について考えました。

インタビュー記事を読む前は、インタビューとは「質問をする人」「話を聞く人」ということだけしか出てこなかったのですが、インタビュー記事を読み、「話を聞き出す人」「話をどんどんつなげていく人」「聞きたいことがあって、そこに話をうまく誘導する人」という意見が出て、「どんなことを聞き出したいかを考えておかなければ、インタビューにはいけない。」「インタビューはインタビューの要である」とまとまりました。

次に、どんな質問をするか考えました。まずは個人で考え、その後、インタビューにいくペアで質問を精選しました。はじめは前任教や、高校時代の部活動、好きな食べ物など、簡単な質問しか挙がっていませんでした。そこで、もう一度、他者紹介として、その先

生のどんなことを紹介したいのか、そのためにどんなインタビューをすればいいのか声をかけをし、再度作業をさせました。その結果、「高校生の頃、どんな仕事に就きたいと思っていたか」「先生という仕事の魅力ややりがい」「なぜその教科を選んだのか」など少し踏み込んだ質問もあがってきました。

最後に、「聞く」ことについて考えました。話を聞く側はどのような姿勢で臨めばいいか、どのように聞けば話す人は話しやすいかを考えました。「表情をよわらかくする」「丁寧に話す」「あいづちをうつ」「相手の顔をみる」などがあがってきました。それらを踏まえてロールプレイングをし、「あいづちをいっさいうたない、反応しない」場合と「あいづちをうち、気になることには質問を重ねた」場合の2パターンを体験しました。その後、感想を言い合いました。あい

実践①
〈3〉聞くということ


- 「聞く」姿勢について考える。
- ロールプレイング

↑

あいづちをうたない

↑

あいづちをうつ




づちがないと話をするのが苦痛で、話をしたくなくなり、あいづちがあることで、自分の聞いてくれていると感じられ、話しやすくなるということが分かったという感想が多かったです。生徒たちは、あいづちでこんなに違うということを体感し、驚いていました。

実際のインタビューでは練習の成果もあり、どのグループもいい顔で、あいづちを打ちながら話を聞くことができていたように感じます。


他者紹介では、発表ツールとして、パワーポイントを使用しました。つくりはじめは、「質問」と「答え」という、メモをそのまま

実践①
〈4〉インタビューにこう



- ・聞きたいことは聞くことができた。
- ・緊張して、問い詰めるようになってしまった。
- ・話をふくらませていくのが難しかった。

実践②
〈5〉他者紹介をしよう



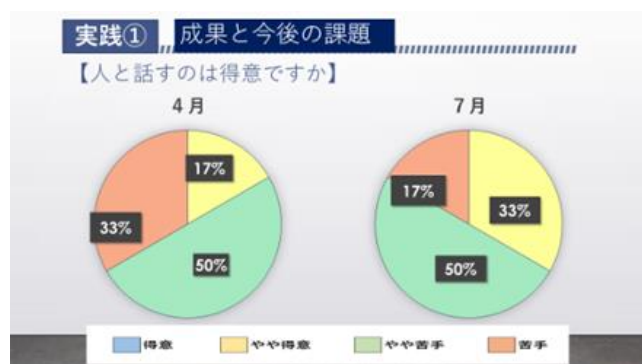
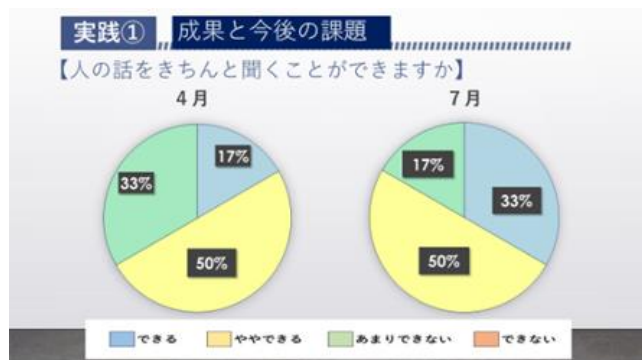
- ・「どんな先生か」というのを伝えるのに苦労した。なかなかびったりくる言葉がなかった。
- ・緊張してしまい、先生の人柄が伝わったかどうかが不安。

発表するようなスライド、原稿になっていましたが、発表の中にインタビューをしてどのような先生だと感じたのかをまとめとして述べることで、と提示すると、スライド・原稿ともに変化があらわれ、パワーポイントを伝えるための一つのツールとしてとらえ、効果的な発表にしようという工夫がみられました。

この実践前後のアンケートから生徒の意識の変化が見られました。「人の話をきちんと聞くことができますか」という問いに対して、四月は「あまりできない」と答えた生徒が約30%いましたが、七月のアンケートでは「できる」「ややできる」の割合が増え、「できない」と答えた生徒は減りました。理由として、「あいづちを意識するようにになった」「聞こうと思うようになった」などという意見が出てきました。

人と話すのは得意ですか、という項目では「苦手」と答えた生徒

が減りました。「話を続けられるようになったように思う。」「得意とまではいかないけれど、話す内容があれば苦じゃなくなった」というのが主な理由でした。
 発表に関しては、発表内容を考えるとともに、人前で話さなければならぬということがある、生徒の苦手意識を払拭させることはできませんでした。



(2) 成果と課題

成果は、「聞く」ということに意識を向けさせることで、生徒自身が「聞こう」とするようになったことです。「聞く」とは無意識的に

行っていそうなことですが、「聞く」姿勢に意識を向けることで、「聞く」ことを大切にできるようにになりました。対話の場面を設定することで他者との会話を楽しむことができるようになりましたが、その一方で、自分が感じたことを言語化することに苦手意識を持っているのには変わりありません。まずは素直に気持ちを言葉にすることから継続していきたいと思います。

また、今回は他者紹介という発表でしたが、自己評価と他者評価で大きな差ができました。声が小さく聞きづらかった生徒が、わかりやすく発表できたと自己評価しています。自分を客観視することができて、弱みを強みに変えていくことができると思うので、発表をして満足するのではなく、ビデオでの振り返り等を取り入れ、事後指導にも工夫していきたいと思います。

四 実践② 「句会を開こう」

(1) 実践内容

次に紹介するのは情報ビジネス科での実践です。

本校の情報ビジネス科が「国語総合」で使用している教科書は、東京書籍の新編国語総合です。内容が現代文編、言語活動編、古文編、漢文編と内容が分かれており、言語活動編が充実しており、「書く」「話す」力を育みたい情報ビジネス科に適当な教科書です。また、現代文編と言語活動編がリンクしており、学びを実践へとつなげられるところも魅力です。

たとえば、昨年度、一年生の国語総合では随筆「ルリボシカミキリの青」を扱いました。この作品から「好きなものがあることの大

切さや、疑問に思う気持ちが発想の源である」ということを学び、この単元終了後、言語活動編の「調査して発表する」へと繋げました。これは新聞から気になった記事を選び、調べ、模造紙にまとめて発表するというものでした。グループで行ったため、二年生では個人での活動も取り入れることとしました。

二年生は一学期に短歌・俳句を学習しました。単元の目標は「言葉にこめられた情景や心情を読み取る」「想像力を働かせて句の主題を読み取る」としました。ただし、読み取る際には、想像だけではなく根拠も探すこととしました。そこから、今度は自分たちで思いを詠み、句会を開く活動へと繋がりました。

まずは教科書に掲載されている俳句を学習しました。少し学習の様子を紹介します。

実践② 句会を開こう

＜1＞俳句を学習する

旅終へて
よりB面の夏休

＜初発の感想＞
・B面というのが何か分からない。

↓

・旅行をとっても楽しみにしていた気持ち。
・「より」という言葉から、もともと夏休みをつまらないもの（おまけ）と考えている。

「旅終へてよりB面の夏休」という俳句です。

まず声に出してよみ、生徒に感想を聞くと、「B面というのが何か分からない」という言葉が返ってきました。

B面について考えた後は、「旅行をとっても楽しみにしていた気持ち」「よりB面の」というところから、もともと夏休みに期待してなかった気持ちがあるなどという感想がありました。

実践② 句会を開こう

<1> 俳句を学習する

鳴門見て
讃岐麦秋渦をなす

〈初発の感想〉
・鳴門の渦と麦秋の渦をかけている。
・徳島から香川に旅行に行った。

↓

・「海」と「麦秋」と、ものは違うけど、
同じように渦を作っているのを見て、感動している。

「鳴門見て讃岐麦秋渦をなす」という俳句からは「渦」という言葉に、鳴門の渦と讃岐麦秋の渦をかけているのでは、「旅の順番は徳島から香川」などという感想が出てきました。

心情はなかなか出づらかったのですが、何度も読み、友人と話す中で、「鳴門の渦と麦秋の渦と、二つの渦を見て、その大きさに感動している様子」などという意見が出てきました。

このように、短い言葉の中にも情景や心情が込められており、それは読み込まれている言葉によって読者に伝わるということを学びました。

次に、「句会を開こう」という言語活動を取り入れました。

活動では、五・七・五のリズムの中に自分の気持ちを詠むこととしました。「俳句」にしようと思ったのですが、今回の学習では鑑賞が中心となり、「俳句」の深みについて学ばせることができなかったので、俳句のリズムで想いを詠むこととしました。

ただし、一つのルールとして「楽しい、さみしい、などの心情を直接表す言葉は使わない」とこととし、心情語を使わずに、自分の気持ちを表現することを目標としました。


生徒の希望により、今回のテーマは「青春」です。

まずはマインドマップを使い、題材を選びました。五・七・五で想いを詠んだ後は、推敲しました。これは、浜島書店の『国語

実践② 句会を開こう

<2> 五・七・五で想いを詠む

・テーマ「青春」から題材を選ぶ。



☆「楽しい」「さみしい」など、心情を直接表す言葉は使わない。

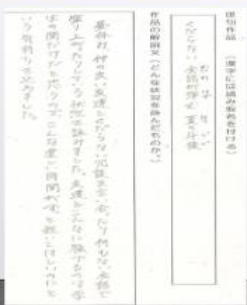
- ・身近に青春と感じられる「もの」や「こと」を探してみる。
- ・マインドマップ

便覧』にある、「推敲のレシピ」を参考にしました。作りっぱなしにせず、言葉の使い方は適切か、自分の思いを伝えられているか、何度も見直し、推敲するよう呼びかけました。

句が完成したら、自分の句の解説文を作成しました。どのような状況、どのような心情を詠んだものか、五・七・五の言葉に凝縮させた思いを文に書きました。俳句を学習した時と違って、自分が詠んだ句なので、この解説文の作成にはそこまで悩む姿は見られませんでした。

実践② (2) 句会を開く

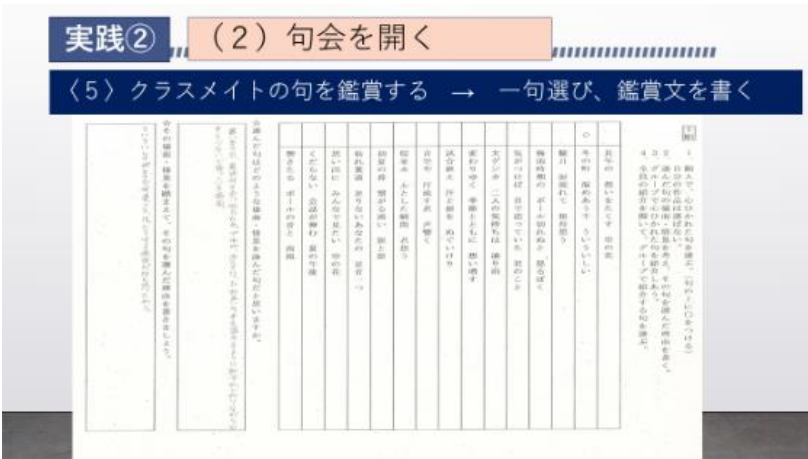
<4> 詠んだ句の解説文を書く



・どのような光景・情景、どのような心情を詠んだものなのかを文にしておく。

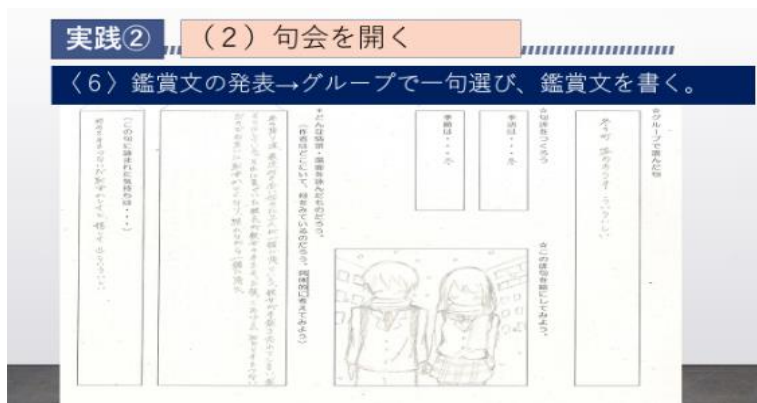
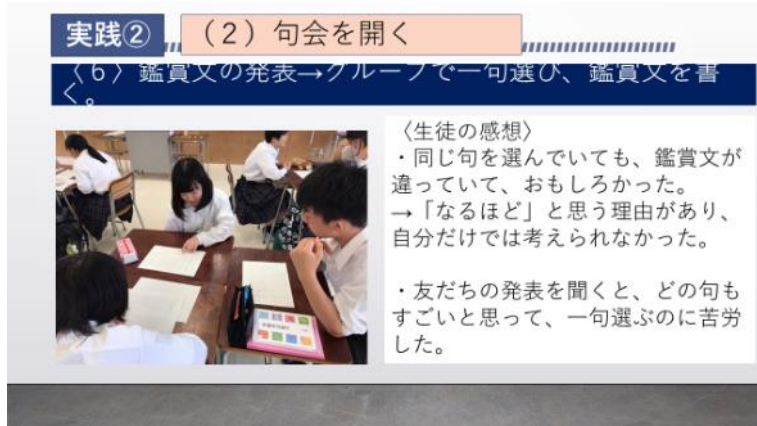
そして、全員の句が完成したところで、句を一覧にし、全員に配布しました。そこから一句選び、どのような状況、どのような気持ちで詠んだものか、その句の主題を鑑賞文として書きました。ここでも気をつけるように声かけをしたのは、想像だけにならないように根拠となる言葉をおさえる、ということでした。ただ、詠まれた句はプロが詠んだ句ではないので、生徒たちはその根拠探しに苦労していました。

次にグループで活動しました。



前時に作成した、鑑賞文をもとに、グループ内で自分が選んだ句と鑑賞文を紹介しました。その後、グループで一句選び、グループの鑑賞文を作成しました。グループ活動では「同じ句を選んでいても、鑑賞文が違っていて、その理由を聞くのがおもしろかった。」という意見がありました。おもしろかったというのはどういうことなのか聞いてみると、「『なるほど』と思う理由があった、自分ではそこまで考えられなかった」と答えてくれました。また、「グループでの意見を聞いてみると、どの句もいいなと思って、なかなか一句選べなかった」

「鑑賞文を考えていると、一人で考えるよりも意見が出てきて、ど



作品が選ばれた生徒にはクラスメイトが書いた鑑賞文を還元しました。自分の解説文、思いとの相違を感想として聞きました。「めぐりゆく 季節とともに 想います」と詠んだ生徒は「クラスメイトと過ごす時間」をこのように詠みましたが、鑑賞文では「恋人と過ごす時間」と解釈されました。それに対して、この生徒は「お

もいという言葉を『想い』という言葉をつかったので、恋人同士の状況だと読めたのかもしれない。もっと具体的に状況をしぼったほうがよかった。次は使う文字にも注意して、工夫していきたい。でも、今回みたいにも、いろんな人に自分の状況をあてはめて読んでもらうのもいいなと思った。」という感想を述べました。

「枯葉道 足りないあなた 足音一つ」という作品です。

解説文には、「前は二つあった足音が、自分の足音ひとつになって、隣にいない人のことを思い出してさみしくなっている気持ち。」と書かれていました。しかし、鑑賞文には「さみしく思いつつも、前に進んでいこうという気持ち。」とありました。作者の生徒は、「この鑑賞文を読んで、自分の気持ちに気づくことができた。さみしい句ができたけれど、『歩く』ということを入れたいと思っていたので、私自身、前に進みたかったのかもしれない。それを言うてくれてうれしかった。」という感想を述べました。

実践②

〈8〉生徒の感想（五・七・五で想いを詠んで）

- 伝えたいことはたくさん見つかるけど、五・七・五で表現するのが難しかった。
- 言葉をたくさん知っていることと、想像力が重要だと思った。
- 自分の気持ちを考えるいい時間だった。

実践②

〈9〉生徒の感想（友だちの句を鑑賞して）

- 人にはいろいろな考え方や感情があることを改めて知った。
- 自分の感性も磨かれる気がしたので、共有することは大事だと思った。
- 自分と違った情景を浮かべているので、「こういうのもありなんだ」と視野を広めることができた。

実践②

〈10〉生徒の感想（どちらが難しかったか）

句

- よんでくれる人に、きちんと伝えるかを考えてつくるのが難しかった。
- 十七文字に想いを込めるのが難しかった。
- 情景に心情を込めるのが難しかった。

鑑賞文

- いろいろな想像ができて、場面を考えるのが難しかった。
- 浮かんだ情景を言葉に直していくのが難しかった。
- 作った人の思いを正確に見つけるのは難しかった。

（2）成果と課題

思いを凝縮させ、句をよみ、解説文を作る。友人の句から情報を集めて鑑賞文を書く。という相互的な活動により、作品を通して対話ができたように思います。鑑賞文から自分の思いに気づくことができ、また、適切な言葉を選択して表現することの大切さに気づくことができているように思います。

課題としては、今回は五・七・五の句を創作しましたが、根拠を得にくい作品もあり、根拠に基づいた鑑賞文を書くということが、多少困難であった点があげられます。作品を精選することも教員の課題だと感じました。また、評価に関してはチェックリストをつくり、自己評価をしましたが、今後、生徒の活動をどのように評価していくのかは、本校国語科の課題だと考えています。

五 まとめ

普通科、情報ビジネス科ともに、生徒の活動を中心においた実践を行いました。

そこで、活動を通して、生徒自身が課題に気づき、自分自身の成

〈情報ビジネス科〉成果と今後の課題

- 多くの情報からまとめる→「句をつくる」
- 少ない情報から文章をつくる→「鑑賞文を書く」
- 作品を通して対話から学ぶ。

- 鑑賞文の正当性（創作の句から根拠は得られるか）
- 評価の仕方（自己評価・チェックリスト）

長を感じることができていました。

教員による舵取りが必要なこともありましたが、自分自身の表現や、友だちの作品からの気づきや学びがあり、生徒たちにとってはそちらのほうがより心に残る大きな学びとなりました。

また、授業前半では「表現すること」に苦手意識を持ち、少し控えめな生徒もいましたが、手順が分かり、根拠を探す、求めるというきっかけがあれば、「表現活動」にも前向きに取り組むことができていました。このことから、教授式の授業も知識を学ぶためにもちろん必要ですが、生徒同士で学ぶことも学びにとって必要なことだと感じました。

また、私自身が短歌・俳句分野の授業を苦手としており、いつもは逃げ腰で、取り上げても型どおりのことしかできていなかったのですが、私が思っている以上に生徒たちの感性は豊かであり、生徒たちの持つ力を育むためには、教材選びも肝心だということに改めて気づかされました。

今回は個別学習からグループ学習へと展開させましたが、言語活動はグループ学習と固定化されているので、土台となる個別学習での言語活動の充実が今後の課題です。また、先ほども述べましたが、言語活動における明確な評価基準の設定です。指導書についているルーブリックをもとに自己評価させたこともありますが、それをどのように評価に盛り込むかというのが本校国語科の課題です。また、表現力は速成されるものではないため、授業での継続した指導が必要だと考えています。

生徒たちが社会で必要とされる表現力、国語力を身につけられるよう、今後も継続して、取り組んでいきたいと思えます。